

(研究ノート)

パネルシアターの活用方法と今後の展望

藤田 佳子 松家 まきこ 松原 健司

キーワード

パネルシアター 歴史 コミュニケーション 展望 コラボレーション

1. はじめに

パネルシアターが1973年古宇田亮順によって発表されてから、40年余りが経つ。パネルシアターとは、「布地のパネル板に絵（または文字等）を貼ったり外したりしてお話、歌遊び、ゲーム等を展開して行う表現方法」である（古宇田ら2009）。古宇田により創出された1973年以降、パネルシアターは保育・幼児教育の現場を中心として活用されてきた。また、後述するように多数の作品・下絵集などの出版もされている。しかしながら、パネルシアターについての学術的な論考はほとんどないといっても過言ではない。筆者らは、今後学術的な論考を進めていくためにも、パネルシアターのこれまでの歴史を整理しておきたいと考えた。

以下、本稿では、まず年代を追ってパネルシアター普及の経過を見るとともに、今までに出された論文や記念誌、雑誌、新聞などをもとにパネルシアターの活用方法などについて概観する。次に、今後のパネルシアターの可能性と研究の方向性について述べていく。

2. パネルシアターの誕生

まず初めに、古宇田がパネルシアターをどのような経緯をもって発表に至ったかみていく。まず古宇田がパネルシアターを生み出すに至るには、3つの出会いがあった（藤田2013）。1つめは、大正大学時代に所属していた児童研究部の活動の中で実践していた「フランネルグラフとの出会い」である。フランネルグラフとは、紙に描いた絵の裏にフランネルを貼って絵人形を作り、その絵人形をフランネルの舞台に貼り、ストーリーを語るものである。もともとは、聖書の布教活動で使われていた（パネルシアター委員会2011）。人形劇に比べて手軽ではあるが、片面しか使えず、古宇田は表現の不自由さを感じていた。2つめは、「松田治仁との出会い」である。貼り絵話の講師として保育講習会に出向いた古宇田は、1969年人形劇の美術家である松田治仁と出会う。松田の奥深く表現豊かな絵は、古宇田の考える世界を具現化し、次から次へと2人で作品（貼り絵話・歌遊び）を制作していった。3つめが「Pペーパーとの出会い」である。1972年、両面に絵を描

ふじた よしこ：淑徳大学 教育学部 准教授
まつか まきこ：淑徳大学 教育学部 兼任講師

まつばら たけし：淑徳大学 教育学部 教授

くことができ、かつフランネルの舞台にくっつく素材（不織布）に出会う。それが、現在パネルシアターの絵人形を描くための材料となっている「Pペーパー」である。不織布で作られているPペーパーに出会うことにより、表現における不自由さや、制作に手間がかかり、かつきれいに仕上げにくい等の制作におけるいくつかの壁が取り払われた。

このような経緯を経て、①両面に絵を描くことができ、表現が広がる、②布なので、耐久性があつて40年以上でも使用できる、③薄くて丈夫なため、いろいろな仕掛けを簡単に施すことができる、といった特徴を持つパネルシアターがついに誕生したのである。

現在では、フリー百科事典ウィキペディア（Wikipedia）でもパネルシアターの素材について、次のように掲載されている。「それまで包装材や防音材として使われてきた不織布の中から、古宇田が最も適性の良い素材を探しPペーパーに使用したのは非常に画期的な事であり、その意味でも、外観が似ているフランネルグラフとは表現力に大きな違いがある（参考・第五回正力賞受賞者を訪ねて『読売新聞』1981年4月8日全国版夕刊。）」（2015年8月28日閲覧）

1977年4月17日の朝日新聞（全国版）でもパネルシアターについて紹介されており、絵が布を張ったパネル板にくっつく原理をわかりやすく解説している。「木のわくに白いフランネルを張り、不織布に油性のフェルトペンで描いて切り抜いた人物や動物を置く。両者のけば立ちがうまくからみ合つて、少し離れたところから絵を投げてスッと吸いつくように密着する。背景や動物や人物を動かしながら、布の舞台にお話や歌を展開するからパネルシアター。幼児教育の教材から宗教団体の布教にまで広く利用されている。」この記事をきっかけにテレビや教育研修会などに古宇田は招かれるようになり、パネルシアターの普及が加速された。

3. 古宇田亮順が考えるパネルシアターの特徴

パネルシアターの特徴として、古宇田（2009）は「見る・演じる・つくる」の3つの視点から、表1のようにまとめている。

古宇田・阿部（1981）は、「パネルシアターは視聴覚文化財の革命である」と記している。さらに古宇田ら（2009）は、これらの特徴により、「子どもに話す意欲、応答する力が生まれ、演者の一方通行にはならず、子どもとの一体感が高まり、パネルシアターの計り知れない楽しみがある」という。

4. パネルシアターの普及

ここでは、パネルシアターの普及を年代ごとにまとめる。パネルシアターが発表されてから40年余りが経ち、古宇田が牽引するなか多くの活動家・実践家が育ち、またパネルシアターは保育現場のみならずいろいろな現場で活用されてきている。それを、年代を追って、まとめてみたい。

第1期「草創期」1972年～1981年

2 古宇田は、浄土宗の住職でもあるので、仏教の教えを子どもたちにもわかりやすく伝えようとパネルシアターを活用していた。同時に、フランネルグラフの貼り絵話の講師として保育講習会で活躍していた古宇田は、保育講習会で使用していた作品をパネルシアターに再構成することで、表現の不自由さから解き放たれ、観客が魅了される作品を松田とともに続々と制作した。1973年のパネルシアター発表は、19作品（絵ばなし6作品、歌遊びとゲーム13作品）が収録された「楽しい絵話と歌遊びパネルシアター」（1973年7月発刊）とともになされた。この時、古宇田と松田は、「くもの糸」「耳なし芳一」「おもちゃのチャチャチャ」などのブラックパネルシアターも含めて、30作品以上をすでに制作していた（藤田2013）。

表1. 「パネルシアターの特徴」

(古宇田他著「実習に役立つパネルシアターハンドブック」2009 P10-11より作成)

見る立場から	<ul style="list-style-type: none"> ① 布地のパネルという素材のやわらかさ、やさしさの上で展開される安心感。 ② 保育者の明るい表情に接しながら味わう喜び。 ③ 絵が貼りつき、その絵が自由に動く楽しさ。 ④ 絵や演技に助けられ、声を揃えてうたえる喜び。 ⑤ 一瞬の変化や意外性のある展開を通して、驚きや不思議な世界を味わう喜び。 ⑥ 未知の世界、楽しい話、勇気ややさしさの話に触れ、心や気持ちが豊かになる。 ⑦ 絵の展開に触発されて、みんなと一緒に手遊びを楽しめる。 ⑧ クイズやゲームを通して応答できる喜び。 ⑨ ときには絵を貼らせてもらったり、見た作品を劇遊び等にして楽しむことができる。
演じる立場から	<ul style="list-style-type: none"> ① 絵があるから素手でお話するよりも気軽にできる。自分の緊張した顔よりも、手に持った絵人形の方に観客の目が向けられ、自然体で話しやすい。 ② 相手の表情を見ながら、話の速さ、アドリブ等を生かして個性的に話せる。 ③ 絵を動かすことができるので、位置の交換や組み合わせ、裏返し等、手軽に自由に演じられる。 ④ 1人でも多人数でも楽しみながら演じられる。 ⑤ ピアノ、アコーディオン、ギター、キーボード等、楽しい音楽と合わせて行う心地よさがもてる。 ⑥ 観客の喜ぶ姿を直接受け止めて行えるので余計に楽しみが増える。 ⑦ 舞台設備が比較的簡単なのでどこでもできる。 ⑧ 絵、音楽、演技があるので言葉の壁を越えて、国際交流の場でも楽しめる。
つくる立場から	<ul style="list-style-type: none"> ① 絵を描いて切り抜けば貼れるので、簡単な作品はすぐ作りたくなる。 ② 思いついたアイデアをお話・歌・ゲーム等に生かせる楽しみ。 ③ 絵の配置や操作方法の楽しさを考え、作品が生み出す喜びへの期待が持てる。 ④ 絵を描く、着色する等の作業から学ぶ作画表現の喜び。 ⑤ Pペーパーの丈夫さから、絵が破けにくく、つくったものは何年でも使用できる。

その後アコーディオン・パネルシアター合同研修会が1975年～1982年まで毎年開催され、創作作品も発表されるようになり、パネルシアターが広がり始める。この時期、すでに関東の大学にパネルシアター同好会（東京女子大学、大妻女子大学、淑徳大学）が発足し、児童研究部（駒澤大学、大正大学、共立女子大学）のなかでも、パネル研究が盛んになっていた（パネルシアター委員会2011）。さらに、1977年4月17日の朝日新聞（全国版）でのパネルシアター紹介がきっかけで、古宇田はテレビや教育研修会に出かける機会が増え、さらに普及が進むこととなった。

この時期、人々の求めに応じて古宇田のパネルシアター本が次々に出版された。1973年「楽しい絵話と歌あそびパネルシアター」（大東出版社）、1974年「パネルシアターのうた 第1集」（大東出版社）、1977年「手づくりのパネルシアター」（大東出版社）、1978年「パネルシアターのうた 第2集」（大東出版社）、1980年「パネルシアターを作る1」（東洋文化出版）、「パネルシアターを作る2」（東洋文化出版）、1981年「こうぞパネルシアター」（東洋文化出版）と、8年間に7冊が刊行されている。作品集だけではなく、1981年の「こうぞパネルシアター」は、パネルシアターの歴史や原理、特徴、詳細な製作方法や仕掛け・演じ方、作品紹介がまとめられており、パネルシアターを学ぶ者には、初めての教科書ともいえる本となった。（藤田2013）また、古宇田以外にも1979年「みんなのパネルシアター」（阿部恵・清水和恵共著、ピタカ社）が発刊された（パネルシアター委員会2011）。

第2期「正力賞受賞による普及」1981年～1983年

1980年に、古宇田が訪問したタイのカンボジア難民キャンプでの国際活動（中外日報1980年12月18日及び日本テレビ放映1980年11月30日）が認められ、1981年3月に第5回正力松太郎賞を受賞した。これがきっかけとなり、読売新聞（1981年4月8日「第5回正力賞受賞者を訪ねて」）をはじめ、佛教タイムス（1981年7月5日）、「新世」（1983年6月倫理研究所）などのメディアでも、パネルシアターを使った古宇田の活動が紹介されるようになった。これらのメディア報道が、より広くまた多くの人々がパネルシアターを認知する機会となり、保育・幼児教育界だけでなく子ども会、青少年のレクリエーションなどの社会活動の領域にも広く浸透し始めた。

折しも1982年に、パイプイゼル、折りたたみ式パネル板が開発され、発売が始まった（パネルシアター委員会2011）。それまではイゼルやパネル板を手作りするしかなかったが、これにより保育現場で、また個人活動家も、気軽にパネルシアターを始めることができるようになった。

第3期「パネルシアター活動家の始動」1983年～1991年

個々の大学での活動を超えて、大学交流合宿（1983年）が開催されるようになり、大学の卒業論文・制作にパネルシアターが取り上げられるようになった。例えば、国立音楽大学の増田裕子は、1983年「パネルシアターによる歌唱指導」で優秀賞を受賞した（パネルシアター委員会2011）。1987年には、大妻女子大学パネルシアター部が、第7回キリン劇遊びフェスティバルに出演した。

1984年～1986年、古宇田は「幼児と音楽」（音楽之友社）に毎月パネルシアター作品を紹介、発表した。音楽とパネルシアターの相性の良さとその相乗効果は、多くの人々に印象付けられ、パネルシアターを普及させるのに一役を担った。

1987年には、子どもから大人までの熱狂的なファンを持つ「トラや帽子店」が結成され、コンサートの中にパネルシアターを導入して全国を興行して回り始めた（～2000年まで）。この活動が、子どものみならず一般のお母さん方がパネルシアターを知る機会となった。

その後、古宇田を中心にして、国内のみならずスリランカ、ネパール、ブータン、カンボジア、韓国等で、海外公演が毎年行われるようになった。1988年には淑徳大学のパネルシアター研究会がハワイ公演を開始し、現在も続いている（表2）。

この時期には、古宇田だけではなく、小林雅代、阿部恵、月下和恵、高橋司、増田裕子等が、次々にパネルシアターの作品集を出版していった（パネルシアター委員会2011）。

第4期「パネルシアター国内外への拡大」1992年～2001年

1992年頃から、保育月刊誌（「幼児と保育」「保育とカリキュラム」「保育の広場」「Piccolo」等）にパネルシアターの紹介記事や作品が掲載され、関連書籍の出版も増え、保育・幼児教育の現場で、なじみのある教材として普及し始めた。第3期で挙げた著者のほかに、中島宏、水野豊二、弘前ひさし、作田忠一、たけとんぼ、かくれんぼ、パレット、CANVAS、後藤恵子、関稚子、藤田佳子、松家まきこ、和気瑞江、古田純子、吉田久子、黒澤ちよ子等が、続々と作品を出版した（パネルシアター委員会2011）。

1992年、小学校教師指導書「道徳I みんななかよく」に、視聴覚教材活用の工夫としてパネルシアターが取り上げられた。このころから、小学校の研究部会の一つである児童文化部でパネルシアターを取り入れた研究も行われるようになった。

海外の公演活動では、地域も回数も人数もさらに増えてくる。モンゴル（3回）、イスラエル

表2. 第3期から現在までのパネルシアターを使った海外講演活動

(古宇田を中心に、筆者の一人である藤田が参加した内容を中心にまとめたもの)

- 1989年5月～1994年1月：アメリカ・オハイオ州滞在時、小学校・幼稚園にて毎月公演。図書館・教会などでも公演。2つのパネル・グループを結成し、活動。(公演回数60回以上)
- 1998年2月：ネパール(カトマンズ、ボカラ)の学校・教会などにて公演
- 2000年3月：ハワイ(オアフ島、マウイ島)の寺院・高齢者施設・幼稚園にて公演
- 2001年3月：インド(ニューデリー、サルナート)の小学校・幼稚園などにて公演、大学にて特別講演
- 2002年8月：グアテマラの学校(小～高校)・幼稚園にて公演
- 2004年8月：ミャンマーの学校・幼稚園にて公演
- 2005年2月：グアムの学校(幼稚園～高校)にて公演、グアム大学にて特別講演
- 2005年3月：スリランカの難民キャンプ・学校・幼稚園にて公演(津波被災に対しての教育支援ボランティア)
- 2005年9月：韓国にて幼児教育者・童話の会対象の研修会及び大学にて特別講演
- 2005年11月：インド(ニューデリー、チャンディガル、カルナール)の学校(幼稚園～高校)・文化交流会にて公演
- 2006年2月：グアムの学校(幼稚園～高校)にて公演、グアム大学にて特別講演
- 2006年8月：モンゴルの高校・養護学校などで公演
- 2007年2月：グアムの学校(幼稚園～高校)10校にて公演、大学にて特別講演
- 2007年3月：ネパールのカニヤ大学・養護施設・保育園などで公演
- 2007年8月：インド・ニューデリーとルディアナにて教師を対象に「パネルシアター・ワークショップ」
- 2008年2月：グアムの学校(幼稚園～高校)、保育園にて公演、及び「国際読書協会」にて特別講演とワークショップ
- 2008年10月：グアムの学校(幼稚園～高校)9校にて公演
「国際読書協会」にて特別講演及びワークショップの実施
- 2010年2月：グアムの学校(幼稚園～高校)9校にて公演
- 2010年8月：グアムコミュニティカレッジにて特別講演
- 2011年3月：モンゴルの自立支援施設、孤児院、保育園、高校にて、公演
- 2011年3月：グアムの保育園・学校(幼稚園～高校)5校にて7公演
- 2012年3月：グアムの保育園・学校(幼稚園～高校)8校にて11公演
グアムコミュニティカレッジにて特別講演
- 2013年2月：グアムの保育園・学校(幼稚園～高校)5校にて7公演
- 2014年2月：グアムの保育園・学校(幼稚園～小学校)5校にて9公演
「国際読書協会」にて特別講演
- 2014年8月：タイのチェンマイ大学教育学部にて特別講義・ワークショップ、幼稚園にて公演
- 2015年8月：タイのチェンマイ大学教育学部にて特別講義・ワークショップ、幼稚園にて公演

(ガザ)(3回)、ドイツ、台湾、カンボジア(3回)、アメリカ、スイス、ネパール(2回)、インド、スリランカ(4回)、ミャンマー、グアム、韓国、オーストラリア、フィリピン、ハワイ、ベルギー、ルーマニア等に出向している(パネルシアター委員会2011)。また、日本から出向だけでなく、2001年オーストラリアから小学校～高校の教員が来日し、パネルシアター研修会が日本(東京)で実施された。(～2004年)

第5期「パネルシアターの定着」2002年～現在

2002年から始まったパネルシアター5人会(初年のみ4人会)は、古宇田亮順、阿部恵、関稚子、藤田佳子、月下和恵の5人が講師の研修会で、毎年開催されるようになった。現在では日本全国のみならず、台湾や韓国からも参加者が集まる450人規模の研修会であり、パネルシアターを実践する者なら一度は参加しておきたい研修会であろう。

この頃になると、ほとんどの保育園や幼稚園にパネルシアターの舞台が備品として置かれ、保育の中でパネルシアターが実践されるようになってきた。第4期の1992年～2001年頃には、パネル

シアターは誕生日会などの行事の時に使われることが多かったが、それ以降は、日常の保育の中で活用されるようになってきた。それは、保育者がパネルシアターの特徴を理解してきたこととともに、Pペーパーにカラー印刷された「カラーパネルシアター」の種類が増え、手軽にパネルシアターを取り入れられる環境になってきたことも要因としてあげることができる。筆者もカラー作品を手がけており、過去5年の間にも表3に示すものを発表してきた。手作りの暖かさは捨てがたいものである一方、作り手のセンスやスキルによって出来の善し悪しが異なる。商品化された均一的な絵人形はそっけないとも思われるかもしれないが、演じる者の豊かで暖かい人間性が子どもたちに伝わることで十分に補えるものであろう。

表3. カラーパネルシアターの作品例

(筆者である松家・藤田が作家として過去5年の間に発表したものを紹介する)

- 2010年2月、「だるまさん」脚本・構成 松家まきこ 絵 吉野智子 (アイ企画)
- 2010年3月、食育パネルシアター「ワン太くんのお弁当づくり」脚本・構成 松家まきこ 絵 いたうなつこ (メイト)
- 2010年3月、食育パネルシアター「いわしのひらき」脚本・構成 藤田佳子 絵 冬野いちこ (メイト)
- 2010年7月、「たこ焼きパクッ!」脚本・構成 藤田佳子 絵 吉野真由美 (大東出版社)
- 2011年4月、「ふらふらフラワー」脚本・構成 藤田佳子 絵 吉野真由美 (大東出版社)
- 2012年4月、「フルーツパフェ大好き」脚本・構成 藤田佳子 絵 吉野真由美 (大東出版社)
- 2013年11月、「バーベキュー」脚本・構成・絵 松家まきこ (大東出版社)
- 2014年11月、「変身マントマン」脚本・構成 松家まきこ 絵 大野太郎 (大東出版社)
- 2014年10月、「もしもどんぐりのぼうしがね」脚本・構成・絵 松家まきこ (大東出版社)
- 2015年7月、「そっくりさん」脚本・構成・絵 松家まきこ (大東出版社)
- 2015年7月、「アイスクリームの歌」脚本・構成・絵 松家まきこ 作詞:さとうよしみ・作曲:服部公 (大東出版社)

さらに子育て支援の場でも、パネルシアターが活用されるようになってきた。地域でパネルシアター活動をしている人々が増えてきたのである。専門職の保育者が行うだけでなく、一つの地域活動としてパネルシアターが活用される機会が増加することで、パネルシアターの底辺が着実に広がられている。

小学校の成果発表の手段としてパネルシアターを子どもたちが制作し発表する事例も増えてきた。また、授業教材(英語、算数、国語、道徳、生活、総合等)としてパネルシアターを活用し、子どもの集中力や意欲を引き出し、効果的な授業実践の事例も散見されるようになった。

プロやアマチュアの団体が参加する人形劇祭りでも、人形劇や影絵、腹話術等と共に、パネルシアターが上演されることも増え、幅広い世代が共に親しみ、楽しめる機会となっている。(表4)

2011年3月11日に世界中を震撼とさせた東日本大震災では、その直後から被災地支援として多くの人々が現地に入り、支援活動を行っている。パネルシアター活動もその一つとして、人々の心のケアにつながればとの願いを持って、活動家や学生たちが福島県・宮城県・岩手県で活動を継続している。(表5)

海外でのパネルシアターについては、青年海外協力隊員として2~3年間現地で活動しているものが新たに増えてきた。パネルシアターを学んだ青年たちが青年海外協力隊員として、スリランカ、グアテマラ、カメルーン、ウズベキスタン共和国、ガボン、パナマ、ドミニカ共和国、ザンビア等を赴任地としてパネルシアターを取り入れながら活動している。幼児教育のみならず、衛生教育やごみなどの環境教育でもパネルシアターを活用して、現地の人々により快適な生活を提起し、充実した教育内容を指導している。その際、パネルシアターは現地の人々に指導内容を受け入れや

表4. 学生の公演活動

(筆者の松家と藤田が過去5年の間に引率した学生の活動を紹介します)

- 2009年7月 茨城公演合宿 (淑徳短期大学・駒沢女子短期大学児童文化部合同合宿)
- 2010年2月 大分公演合宿 (淑徳短期大学児童文化研究会)
- 2011年2月 福岡公演合宿 (駒沢女子短期大学児童文化部)
- 2011年8月 茨城合宿 (淑徳短期大学児童文化研究会)
- 2011年8月 長崎公演合宿 (駒沢女子短期大学児童文化部)
- 2012年8月 長野合宿 (淑徳短期大学児童文化研究会)
- 2013年8月 長野合宿 (淑徳短期大学児童文化研究会)
- 2013年2月 神津島公演合宿 (駒沢女子短期大学児童文化部)
- 2013年3月 福岡公演合宿 (淑徳大学パネルシアタークラブ)
- 2014年8月 茨城公演合宿 (淑徳大学パネルシアタークラブ)
- 2015年3月 福岡公演合宿 (淑徳大学パネルシアタークラブ)
- 2010年～現在 (毎年) 川崎人形劇祭りに出演 (駒沢女子短期大学児童文化部・鶴見大学有志)
- 2013年～現在 (毎年) 練馬人形劇フェスティバル (淑徳大学パネルシアタークラブ)
- 2013年～現在 (毎年) 多摩人形劇祭りに出演 (淑徳大学パネルシアタークラブ・駒沢女子短期大学・実践女子大学)

表5. これまでのパネルシアターによる被災地支援活動

(筆者である松家と藤田が行った内容を中心にまとめたもの)

- 2011年4月から、東日本大震災のボランティアとしてパネルシアターキャラバンを組織し、淑徳大学の学生とともに石巻・仙台の保育園、小学校、知的障害者施設、高齢者施設仮設住宅などパネルシアター公演をしながら巡回する。継続中である。(藤田)
実施：2011年9月、2011年12月、2012年8月、2013年8月、2014年9月
- 2011年7月 (財) こども未来財団主催 東日本大震災 赤ちゃん一時避難プロジェクトに講師、現地スタッフとして参加し親子のふれあいタイムで上演する。(松家)
- 2011年、2012年、2013年、9月駒沢女子短期大学の教員、学生と共に岩手県陸前高田を訪問。保育所、子育て支援施設、仮設住宅を巡り、保育ボランティア保育セミナー講師・児童文化部保育ボランティアとパネルシアター公演、保育者のパネルシアター講座を行う。(松家)
- 2013年7月、9月、福島県いわき市子育てサポーターの育成 (松家)
- 2014年1月 宮城県夢基金心のケア事業 保育技術研修会に講師として参加し、心をつなぐ教材として「ふれあい遊びとパネルシアター」を紹介する (松家)
- 2014年4月～現在 福島県いわき市子育てサポーター団体を結成し、顧問として、いわき市内の子育て支援施設で、ふれあいタオル遊びやパネルシアターを通じた支援活動、自主研修会を行う。(松家)

すくする工夫として大いに活躍している。これは、絵があってわかりやすいこととともに、コミュニケーションを取りながら話をするこも、受け入れを促している一因であると思われる。

5. CiNii掲載文献からみたパネルシアターの普及

本研究のため、国立情報学研究所の学術情報ナビゲーター CiNiiで、「パネルシアター」をキーワードにして文献検索を行った。その結果、1993年12月から2015年3月までに発表されてCiNiiに掲載されていた文献は119件あり、これを8分類した結果を表6にまとめた。分類の方法は、文献掲載の形態(雑誌、紀要・学会など)及び文献の研究目的を手掛かりとして行った。まず掲載の形態で雑誌(分類番号1・8)と紀要・学会など(分類番号2～7)に分けた。次に、研究目的とその内容から、分類を行い、最終的に8つに分類することができた。

表6. 「CiNiiで検索されたパネルシアター関係の文献」

番号	文献内容による分類	本数
1	作品紹介 ・保健・健康指導 (うめちゃん'S 2013、2014 他56) ・食育 (大関三千子2015a、2015b他11) ・表現活動 (3)	74
2	実践的研究 ・小学校の授業への導入の試み (石井ほか2009、2010、2013) ・養護学校での実践事例研究 (樋口・長谷川2002) ・保育現場での実践事例研究 (4) ・実習での実践研究 (2) ・実践のプロセス評価 (2) ・実践の評価比較 (学生・専門家)(安田2011) ・保育現場での食育活動 (3)	16
3	指導法研究 ・海外での指導法の事例研究 (矢野・田中2014) ・被災地で授業パネルシアターの開発 (田村ほか2013) ・教材としての可能性 (1) ・保育者養成課程における指導法 (6) ・幼児への言葉指導 (1)	10
4	教材の比較研究 ・パネルシアターとエプロンシアター (熊田2010、2011) ・絵本・紙芝居・パネル・テレビ (吉田・藤田2007) ・紙芝居・パネル・ペープサート (井戸2001~2004) ・絵本・パネル・ビデオ (松村1996) ・保育教材としてのパネル (1)	9
5	教材制作の研究 ・製作における情報機器の活用 (穂坂2005、2008)	2
6	作品研究 ・鑑賞にみられる特性 (藤田2012b)	1
7	パネルシアターの歴史 ・創始者古宇田亮順とパネルの誕生 (藤田2013)	1
8	記事・ジャーナル・リポート ・パネルはコミュニケーション (1) ・パネルシアターの誘い (1) ・パネルシアターがおもしろい (1) ・パネルでジェンダー学習 (1) ・読書へ誘うパネルシアター (1) ・パネルで布教伝道 (1)	6

表6の119本の文献のうち、62%以上が作品紹介である。作品紹介（保健・健康指導）は、養護教諭応援月刊マガジン「こころのオアシス」（健学社B5版48頁、2014年3月号で休刊）に掲載されたものである。また、作品紹介（食育）も、学校教育関係者を中心に出版されている月刊誌「食育フォーラム」（健学社B5版88頁）に掲載されたものである。お話や歌遊び、手遊びなどのパネルシアター作品は、数多くの作品集が出版されているが、保健・健康・食育の分野は出版されている作品集が少ない。そのため、現場の要望に応えての企画でこのように多くの作品が教育関係の月刊誌で紹介されている。また、分類番号8番の「記事・ジャーナル・リポート」も報告的な意味合いが強い。

このように整理すると、パネルシアターに関しては、その実践・事例報告、他の児童文化財・視

聴覚文化財と比較した特色の紹介など、総じて「現場ですぐに活用できる作品」「現場での具体的な活用」「教材制作の方法」「パネルシアターの特徴を生かした実践につながる指導法」の記述がほとんどで、研究といえるものはほとんどないと言える。

6. 今後のパネルシアター研究のあり方

パネルシアターの特長はその利用者によく理解されており、より効果的に利用することを意図した作品が発表され、その利用方法についての提案も多数なされていることは、5の結果からも窺い知ることができる。考案者である古宇田は、「パネル板に絵がそのまま貼り付くことだけでもちょっとした驚きなのに、外すことも、裏返すことも、絵の上に重ねることもでき、思わぬ展開も見られ、喜び、笑い、歓声、共感が大きくなります。新しい展開を通して、一緒にうたい、考え、子どもに話す意欲、応答する力が生まれ、演者の一方通行にはならず、子どもとの一体感が高まる場所に、パネルシアターの計り知れない楽しみがあります。」(古宇田ほか、2009)と記しており、CiNiiで検索できる資料でも概ねこの主張に沿った見解が表明されている。しかし、学術的にこの主張を検証するような研究は、遺憾ながらこれまでほとんどなされていない。この点は、パネルシアターと類似の活動、例えば、絵本の読み聞かせなどと比べて遅れが目立つ部分である。

絵本などの読み聞かせについてはすでに多くの研究がなされている。例えば玉瀬(2012)は、250以上の関連資料をもとにして、まず読み聞かせの定義を示し、次に保育の教育、国語教育、心理学研究、および地域における読み聞かせ活動について概観した。さらに、保育の教育における読み聞かせ経験の意義を、読み聞かせに関する知識、技能、態度、読み聞かせに使われる材料文の影響など、様々な観点からの研究をまとめて紹介している。パネルシアターに関して、玉瀬(2012)の提示した研究の枠組み、あるいは個別の分野での研究のまとめを参考にして、パネルシアターを演ずるために必要な知識や技能、態度、素材、親子のコミュニケーションに与える影響など、多面的に研究が進められることが望ましい。

ここまで何度か紹介している古宇田ほか(2009)は、保育実習や教育実習でパネルシアターを活用したい学生には必須のテキストであり、パネルシアターを実演する際の表現分野、作成および演じ方の留意点などについて具体的に紹介されている。しかし、その演じ方を裏付ける研究、演じられる物語そのものについての検討は、なされていない。あるいは引用文献から窺い知ることができない。以下では、絵本の読み聞かせなどを対象として行われた研究も踏まえて、筆者らが考えるパネルシアターの望ましい活用方法とそれに関連する研究について述べていく。

親子のコミュニケーションを育むパネルシアター

現在、筆者らは子育て支援、育児支援のツールとしてのパネルシアターの効果を研究している(松家ら2015)。この研究では、親子でパネルシアターを見聞きする体験をすることが、母親の育児感情を高め、母親としての役割をこなしていくことへのストレスも低減させる効果があるのではないかと仮説を検証しようと試みた。パネルシアターの親子教室に通う21名の母親を対象として行ったアンケートと自由記述の調査結果は、概ね仮説を支持していた。今後は、統制群を設けた比較対照実験を行うなど、より詳細な研究によって今回の結果を検証していきたいと考えている。

この研究では、パネルシアターの特性である“演者と観客との応答性と共感性”(古宇田、2009)が重要な要素となる。一方、子どもが共感的に物語に応答しているのかどうかは半ば自明のこととされているようでもある。パネルシアターが子どもの共感性に与える影響についても研究事例はほとんどなく、ここでも別の研究を参考にする。例えば、就学年齢前の160名の幼稚園児を

対象とした今井・桶本（1973）の実験では、年齢が進むに連れて幼児の共感性は高まるか、喜びの情緒に関する共感的行動は、悲しみや怒りに関する共感的行動よりも容易であるか、などの仮説を検証しようとした。被験者となった幼児は、3枚の絵からなる物語を提示されて、その結論の絵から想起される感情に相応しい表情を示す表情図を、5種類の異なる感情を示す図から選ぶ。その結果、年齢が進むに連れて共感性が高まることが、統計的に有為な差で示された。

他にも、母親の幼児に対する言葉かけが幼児の共感性にどのように影響するかも重要な観点であり、こちらは田中・岩立（2006）の研究が参考になる。この研究では、52名の幼稚園児を対象に、まず幼児の共感性についての調査を行った。「喜び」「驚き」「悲しみ」「恐れ」の4つの感情を表出する紙芝居と表情図を用意して、紙芝居の読み聞かせを行った後、最後に主人公が示すと幼児が考える表情を選んでもらい、それが実験者が想定したものと一致するかどうかを確認した。一方、同じ幼稚園で園児の母親を対象として、母親の言葉かけが、幼児のネガティブな感情への共感性に影響を与える可能性などについて、質問紙調査を行った。その結果、3歳児は「喜び」系の共感性が最も高く出のに対して、4歳児では4つの感情への共感性の差異が縮まることが示された。一方、母親が特定の対象についての感情について述べることは、幼児のネガティブ感情の共感性を高める要因となるが、ポジティブ感情の共感性を高める要因にはならないと結論している。パネルシアターでも、様々な感情要素を取り入れた作品が発表されているが、それを演ずることが、例えば幼児の共感性にどのように影響するか、田中・岩立（2006）が示すように、ポジティブ感情よりもネガティブ感情への影響がより大きいのか、作品によって、演じ方によってその影響は異なるのかなど、筆者らの研究でも留意しておくべきポイントが示されている。

また、絵本を介した親子のコミュニケーションを対象とした吉田（2011）は、親子間には独自の読み聞かせスタイルが生じることを示唆している。2006年から基本的に15家族を対象とした継続調査を行っているこの研究では、多岐にわたる研究目的を掲げている。そのうち、筆者らのパネルシアターの研究との関連で見ると、絵本を介した親子の相互作用の発達の变化、絵本を介した親子のコミュニケーションスタイルと子どもの言語発達との関係、親の育児ストレスや絵本の読み聞かせに対する親の意識の側面などのテーマが特に興味深い。こうしたテーマを検討する素材となる絵本の読み聞かせスタイルは、親子の発話を文単位で区切り、全発話を分析対象として、約20の分類カテゴリーに分けていって分析している。その結果を元に、親主導型か子ども主導型か、さらに子どもの行動と親の行動観察の結果も踏まえて、親子のコミュニケーションスタイルが、家族によって異なることを示している。どこまで同じ手法を使えるかはわからないが、パネルシアターの使い方も親子によって異なるパターンになることは十分予想される。さらに、そのパターンの違いが親子のコミュニケーションや育児ストレスと関連していることも考えられる。

これに関連して齋藤・内田（2013）は、子ども中心で子どもとの体験を共有しようとする「共有型」養育態度と、母親主導で子どもに関わり、必要と思えば罰を与える「強制型」養育態度での絵本の読み聞かせ場面での母子相互作用の比較検討を行っている。3から6歳児とその母親29組を対象として行われた調査の結果、子どもの年齢に関わらず「共有型」の母親は子どもに共感的で、子どもの主体性のある発話に呼応して自ら考える余地を与える発話になることが多く、強制型では逆に子どもに考える余地を与えない発話が多いという結果になった。パネルシアターでも、母親の養育態度が子どもに与える影響は同様のものがあってもおかしくはなく、こうした視点を持つことも必要と考えられる。

なお、パネルシアターに関してこのような研究が求められる背景には、パネルシアターの舞台が

小型化し、家庭でも使いやすいものが普及し始めていることがある。そもそも、親子のコミュニケーションを活性化する目的で、パネルの小型化が図られたこともあり（松家2012）、その効果を検証する意味でも、ここに示した関連する研究を参考にして、パネルシアターのための研究方法を確立していく必要がある。

ベビーサインとのコラボレーション

筆者らは、前述の親子間のコミュニケーションに対するパネルシアターの影響以外に、ベビーサインとパネルシアターの関係についても研究を進めたいと考えている。History of Baby Sign Language (<http://www.babysignlanguage.com/basics/history/>)によると、19世紀にアメリカの言語学者であるウィリアム・ドワイト・ホイットニーが、聴覚障害を持つ両親の子どもが両親とジェスチャーを交えてコミュニケーションを取る様子を観察し、これを記録に残していることが、ベビーサインの発見とされている。しかし、その後しばらくこの発見は顧みられることが無く、1970年代以降に“再発見”された。その後、ジョセフ・ガルシア博士が中心となる手話型のベビーサインと、リンダ・アクレドロ博士とスーザン・グッドウィン博士が中心となるジェスチャー型のベビーサインが、それぞれ紹介されている（吉中・吉中2009）。日本では、2000年頃上陸し、近年話題になっている。言葉をまだしゃべることのできない子どもでも、ベビーサインを覚えて使うことで、親子のコミュニケーションが促進されるので、母子ともにストレスを軽減し、育児感情も肯定的に維持ししていくことができると期待されている。この点は、アクレドロとグッドウィンが1980年代から近年までに行った彼らの研究を踏まえて、一般向けの著作としても発表している。この著作は翻訳もされていて（アクレドロ・グッドウィン2010）、日本でのベビーサインの普及にも役立っている。

その内容をここで詳しくは述べない。が、要点は、ベビーサインもパネルシアターも、コミュニケーションのツールとして共通するものがあるということである。現在ベビーサインは、生活の中で場面ごとにサインを教えたり、ビデオや絵本を見ながらサインを教えたりしている。対面して双方向のコミュニケーションを行いながらお話をするパネルシアターは、ベビーサインを使う場合にも、より効率的に覚えることができる可能性を持っているのではないかと推察する。

なぜなら、ベビーサインの教材として多く使われている絵本やカードは、単語を覚えるには大変便利だが、動作や場面展開に関しては絵本やカードのような静止画では説明しにくい。例えば、入れ替わる、渡す・持つ・離す、乗る・降りる、注ぐ・溢すなどの違いや、あったものがなくなるなどは動作とともに示すことが必要である。比較についても同様で、向きが様々なものの大きさや長さを比べるなどは静止画ではなかなか説明することが難しく、実際の場面に出会った時でない子どもに伝えるににくい。そして、その点は、まさに絵を動かしてお話を進めていくことのできるパネルシアターが有効であると考えられる。しかも、ベビーサインを始める月齢が6～9カ月頃からと早いことから、DVD教材のようにどんどん画像が進んでしまうものより、静止画と動画の両方の要素をそなえたパネルシアターを通して、人と応答しながら進めていく方が理解も早いのではないかなどの仮説が考えられる。絵本の場合と同様に、ベビーサインについての先行研究を参考にしつつ、ベビーサイン用の作品開発や、ベビーサイン用の様々な教材との比較などを行いたいと考えている。

11

これらの研究を進めていった結果、またそれを踏まえてパネルシアターが普及することで、親子間のコミュニケーションがスムーズになれば、育児ストレスが減少し、育児の楽しさ・喜びを感じながら子育てができるようになるだろう。育児が怖いという若者が減り、少子化を食い止める方策

の一つになればとの願いを持ってこの分野とのコラボレーションのもと研究を進めていきたい。

7. おわりに

パネルシアターは児童文化の視聴覚教材ととらえられがちである。しかし、本論で述べてきたように、対象は子どもだけでなく、年齢・言葉・障がい・国境を超えて、幅広い人々を対象とした、豊かなコミュニケーションができる表現技法である。絵があり、演者が表情豊かに語り、しかもコミュニケーションを取りながらその場に合わせた応答をしていくことができるパネルシアターは、多様な場面で大いなる可能性を持つ。このパネルシアターが今後多くの分野でその特徴を生かしながら活用されるようになることを期待する。

〈引用文献〉

※心理学研究に準じて表記する

阿部恵・清水和恵（1979）。みんなのパネルシアター ピタカ社

リンダ・アクレドロ、スーザン・グッドウィン（共著）吉中みちる・吉中まさくに（訳）（2010）。

最新ペビーサイン 主婦の友社

藤田佳子（脚本・構成）・冬野いちこ（絵）（2010a）。食育パネルシアター「いわしのひらき」メイト

藤田佳子（脚本・構成）・吉野真由美（絵）（2010b）。「たこ焼きパケッ！」大東出版社

藤田佳子（脚本・構成）・吉野真由美（絵）（2011b）。「ふらふらフラワー」大東出版社

藤田佳子（脚本・構成）・吉野真由美（絵）（2012a）。「フルーツパフェ大好き」大東出版社

藤田佳子（2012b）。古宇田亮順のパネルシアター作品分析（1）：「シャボン玉とばせ」の鑑賞にみられる特性 淑徳短期大学研究紀要、51、151-166。

藤田佳子（2013）。パネルシアターの歴史（1）：創始者古宇田亮順とパネルシアター 淑徳短期大学研究紀要、52、181-196。

樋口絢子・長谷川和之（2002）。目で見て自分から手を出す授業づくり：Sさんの事例を通して 情緒障害教育研究紀要、21、190-196。

穂坂卓（2005）。パネルシアター製作における情報機器の活用（1） 筑紫女学園短期大学紀要、40、90-104。

穂坂卓（2008）。パネルシアター製作における情報機器の活用（2） 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要、3、299-316。

今井靖親・桶本真也（1973）。幼児の共感性に関する実験的研究 奈良女子大学紀要、22、15-193。

井戸裕子（2001）。200保育内容「表現」における教材研究：紙芝居・パネルシアター・ペープサートを作って、演じて 日本保育学会大会発表論文集、54、400-401。

12 井戸裕子（2002）。190保育内容「表現」における教材研究：紙芝居・パネルシアター・ペープサートを作って、演じて（Ⅱ）日本保育学会大会発表論文集、55、380-381。

井戸裕子（2003）。324保育内容「表現」における教材研究：紙芝居・パネルシアター・ペープサートを作って、演じて（Ⅲ）日本保育学会大会発表論文集、56、648-649。

井戸裕子（2004）。100保育内容「表現」における教材研究：紙芝居・パネルシアター・ペープサートを作って、演じて（Ⅳ）日本保育学会大会発表論文集、57、200-201。

石井光恵・澤村明子・太田徳子（2009）。「生活」の授業にパネルシアターを導入する試み 日本

- 女子大学紀要、家政学部 56、9-16。
- 石井光恵・澤村明子・太田徳子 (2010)。「生活」の授業にパネルシアターを導入する試み(Ⅱ) パネルシアターで発表しよう、ポップコーン作り 日本女子大学紀要、家政学部 57、1-10。
- 石井光恵・澤村明子・太田徳子 (2013)。「生活」の授業にパネルシアターを導入する試み(Ⅲ)： 単元「ひろがれわたし」、「もうすぐ2年生」での実践を通して 日本女子大学紀要、家政学部 60、1-11。
- 古宇田亮順 (1973)。楽しい絵話と歌遊びパネルシアター 大東出版社
- 古宇田亮順 (1974)。パネルシアターのうた第1集 大東出版社
- 古宇田亮順 (1977)。手づくりのパネルシアター 大東出版社
- 古宇田亮順 (1978)。パネルシアターのうた第2集 大東出版社
- 古宇田亮順 (1980a)。パネルシアターをつくる① 東洋文化出版
- 古宇田亮順 (1980b)。パネルシアターをつくる② 東洋文化出版
- 古宇田亮順・阿部恵 (1981)。こうざパネルシアター 東洋文化出版
- 古宇田亮順・松家まきこ・藤田佳子 (2009)。実習に役立つパネルシアターハンドブック 萌文書林
- 熊田武司 (2010)。保育士におけるパネルシアターおよびエプロンシアターの実践について 岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要、42、57-67。
- 熊田武司 (2011)。保育士のパネルシアターおよびエプロンシアターへの意識について 岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要、43、117-129。
- 松家まきこ (脚本・構成)・吉野智子 (絵) (2010a)。だるまさん アイ企画
- 松家まきこ (脚本・構成)・いとうなつこ (絵) (2010b)。食育パネルシアター「ワン太くんのお弁当づくり」 メイト
- 松家まきこ (2010c)。バーベキュー 大東出版社
- 松家まきこ (2012)。コミュニケーション力を育むミニパネルシアターの活用法について 日本保育学会大会発表要旨集、65、843。
- 松家まきこ (脚本・構成)・大野太郎 (絵) (2014)。変身マントマン 大東出版社
- 松家まきこ (2014)。もしもどんぐりのぼうしがね 大東出版社
- 松家まきこ (2015a)。そっくりさん 大東出版社
- 松家まきこ (脚本・構成・絵) 作詞：さとうよしみ・作曲：服部公 (2015b)。アイスクリームの歌 大東出版社
- 松家まきこ・藤田佳子・守谷賢二・松原健司 (2015)。母親の育児感情と母性意識に与えるパネルシアターの効果 国際経営・文化研究 (印刷中)
- 松村和子 (1996)。豊かな言語環境を作る「保育教材」の研究：「はらぺこあおむし」の絵本・パネルシアター・ビデオをめぐる 日本保育学会大会発表論文集、49、138-139。
- 大関三千子 (2015a)。みち子先生の食育パネルシアター (11) 6つの食品群 食育フォーラム、健学社
- 大関三千子 (2015b)。みち子先生の食育パネルシアター (12) 献立の考え方 食育フォーラム、健学社
- パネルシアター委員会 (高橋司・武智公英・古宇田亮順・長谷川三恵) (2011)。夢と笑顔をはこぶパネルシアター～誕生40周年記念誌～ 浄土宗。http://jodo.or.jp/onki800/kinen/tomoikido/panel_3.htmlからダウンロード可能
- 齋藤有・内田伸子 (2013)。幼児期の絵本の読み聞かせに母親の養育態度が与える影響：「共有型」

- と「強制型」の横断的比較 発達心理学研究、24、150-159。
- 玉瀬友美（2012）。「保育」の教育における読み聞かせ経験—その教育心理学的研究— 風間書房。
- 田村仁真広・行田稔彦・田辺基子・中河原良子（2013）。被災地とつながるパネルシアター：「授業パネルシアター」をともに創り、ともに活かす（ラウンドテーブル11、発表要旨） 日本教育大会研究発表要項、72、92-93。
- 田中あかり・岩立京子（2006）。母親の幼児に対する「言葉かけ」が幼児の共感性に及ぼす影響：ポジティブ感情の共感に注目して 東京学芸大学紀要、総合教育科学系、57、63-70。
- うめちゃん'S（2013）。パネルシアターで健康教育（第8回）朝ごはんをしっかりと食べよう：指導案と展開例 こころのオアシス、養護教諭応援マガジン11（11）、健学社
- うめちゃん'S（2014）。パネルシアターで健康教育（第12回）朝ごはんをしっかりと食べよう：絵人形の作り方 こころのオアシス、養護教諭応援マガジン12（3）、健学社
- 矢野博之・田中正代（2014）。パネルシアターの実践指導法研究（1）：モーリシャスでの指導ワークショップを事例として 大妻女子大学家政系研究紀要 50、59-68
- 安田伸子（2011）。パネルシアター作品に関する学生と専門家の評価の比較 甲子園短期大学紀要、29、64-68。
- 吉田佐治子（2011）。絵本を介した親子のコミュニケーションの発達 摂南大学教育学研究、7、11-22。
- 吉田博子・藤田佳子（2007）。幼児教育における児童文化：実習保育所における児童文化の現状について 淑徳短期大学研究紀要、46、131-143。
- 吉中みちる・吉中まさくに（2009）。親子で楽しむベビーサイン：赤ちゃんとお手てで話そう 実業之日本社

（受理 平成27年9月4日）